

## ハンプティ・ダンプティとは？

以前見た映画の中に、ロバート・レッドフォードとダスティン・ホフマンの主演した「大統領の陰謀」というのがあった。原題は「All the President's men……」というもので、これはマザー・グースからとったものである。

マザー・グースの原典では次のようになっている。

“Humpty Dumpty sat on a wall,  
Humpty Dumpty had a great fall.  
All the King's horses,  
And all the King's men,  
Couldn't put Humpty together again.”

訳) 「ハンプティ・ダンプティが塀の上に坐ってた  
ハンプティ・ダンプティがドスンと落ちた  
王様の馬と  
王様の兵隊全部でも  
ハンプティをもう一度集めることはできない」

この詩はナゾナゾになっているのだが、ハンプティ・ダンプティとは「卵」のことなのである。一度こわれてしまった卵は、どうしても元にはもどるはずがない。先に触れた映画の題名は、そこを暗示しているのであって、なかなか意味深長である。

この詩は、ルイス・キャロルの作になる「不思議の国のアリス」の続編「鏡の国のアリス」の中にも引用されている。アリス物であるから、例によってハンプティ・ダンプティなる人物が実際に登場してきて、塀の上に坐りながら、アリスと話をするという設定になっている。その時引用されているのは次の詩である。

“Humpty Dumpty sat on a wall:  
Humpty Dumpty had a great fall.  
All the King's horses and all the King's men  
Couldn't put Humpty Dumpty in his place again.”

訳) 「ハンプティ・ダンプティずんぐりむっくり、へいの上、  
ハンプティ・ダンプティ、ずっでんどう、  
王様の馬と兵隊みんなでも  
ハンプティ・ダンプティ、もとの場に返す訳にはまいらない」

ここでは、最後の一行が違っているが、マザー・グースはもともと昔から伝わってきたものであるから、この程度の差異は仕方があるまい。大意は前述のものと同じだが、「……もとの場に返す訳にはまいらない」という個所は、後の方が映画の題意に適しているようだ。

しかし、これはあくまで外国の場合である。日本の場合にはまた別の解釈が必要なのである。「卵」のように一度落ちたらそれまでというのでは不相当であるから、「ボール」のようによくはずんで、「もとの場所に戻れる」ものというような解釈が適当ではなかろうか。(伊藤 宰)

参考：

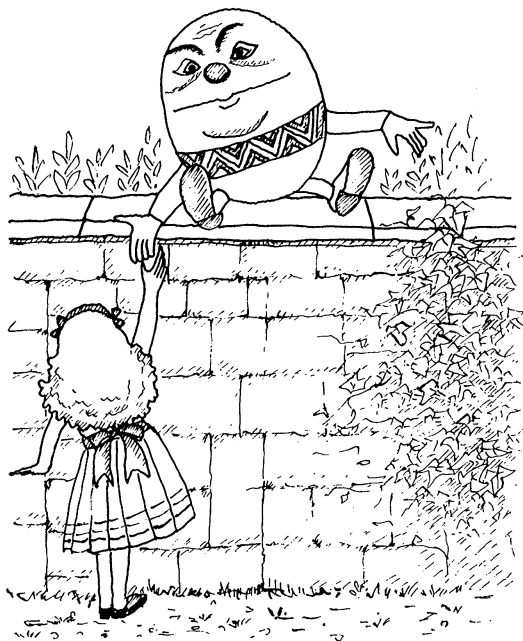
『マザー・グースのうた』 草思社

『鏡の国のアリス』 角川文庫

『Through the Looking-glass

and what Alice found there』

Holt, Rinehart and Winston





## 雑 想 ----- 視点について -----

松本の街からは、北アルプスの山波がはるかに眺望できる。ある夏、知人に連れられて、奥穂から北穂を歩いたことがある。その日は霧がでて、見えるのは目の前の岩肌ばかりだった。慣れぬ山歩きで、散々な目に合ったことを覚えている。それにしても、松本の街から北アルプスの全容は手にとるように見えるのに、いざ山に登ってみると、目の前の岩肌しか見えないのはどういう訳だろうか。その時思ったのは、鳥のように距離をおいて見れば全体像がつかめ、虫のように地について見ればその細部がつかめるといふ、漠然としたものだった。

しかし、今思えば、誤りではないにしても、それではあまりに単純である。微妙にニュアンスがちがう。それは、一言でいえば、なにを見るかによって視点は定められるべきだということである。北アルプスの山波を眺望したければ、松本の街から見るべきだし、岩肌の荒さを見なければ、その場に足を運ぶべきなのである。ただ、ここで注意しなければならないことが2つある。ひとつは、いま述べた両者のいずれが欠けても、北アルプスをよく見たことにはならないということである。そして、もうひとつは、両者はその扱っている領域が異なっているということである。眺望しようと思えば岩肌が見えなくなるし、また、岩肌に目をやれば眺望はできなくなってしまうからである。

視点は、山に限ったものではない。日常生活のあらゆる分野で、私たちは様々な視点をを用いている。ちなみに私などは社会学や文化人類学と言われているものに興味がある。ここでは、人間をとらえていく視点がきわめて重要である。人間論など大それたことを述べる気はないが、人間を見ていく場合でも、どのような視点から人間をとらえるかによって、そこに描かれる人間の様相は異なったものになってくる。

ここに、1冊の著作がある。上山春平氏の『深層文化論序説』である。ひとつの仮説として、上山氏のとらえ方を紹介しよう。上山氏は、人間を見るにあたって、「われわれの意識を世界にする立場」「地球を世界にする立場」「全物質を世界にする立場」という3つの視点をあげている。誤解

を恐れず、これらの視点を私なりに整理してみたい。それは、はるか宇宙の彼方から私という人間に接近していく場合を考えればよい。——①まず、青色に輝く地球の様子が見えてくる。②次に、もう少し接近すると、人間たちが形造っている社会生活の様子が見えてくる。③更に接近すると、私という人間がなにやら悩んでいる様子が見えてくる。④もっと接近すると、原子とか分子とかが運動している様子が見えてくる。——この4段階に区分することができるだろう。上山氏は、「地球を世界にする立場」から、①を扱う分野を地球学と呼んでいる。次に、「われわれの意識を世界にする立場」から、②を扱う分野を社会学と、そして③を扱う分野を自我学と呼んでいる。更に、「全物質を世界にする立場」から、④を扱う分野を普遍学と呼んでいる。

人間を見るとき、少なくとも、この①～④の幅があることに留意しなければならない。どのように人間を見ていくのかによって、あるいは人間のどのようなものを見ていくのかによって、①～④を使い分けるべきなのである。例えば、人間と人間とのコミュニケーションを見るとき、これは③の社会学の分野で扱う。その場合、②の地球学における動物のコミュニケーションも参考にはなるが、それを直接に適用すれば、貧弱なコミュニケーションしか見えてこない。人間のコミュニケーションを見るとき、地球学も参考にすべきだが、やはり社会学で扱うべきであり、そこに地球学を必要以上に介入させてはならないのである。このように、①～④は相互に関連性ももちながら、それぞれ独自の分野としてあるのである。

人間を見るうえで、生物学や心理学がどのような位置をしめるか、その説明を求められたとき、無自覚には了解していても、即答できる者は多くないに違いない。しかし、上山氏のような視点があれば、その説明はきわめて簡単である。また、その位置を確かめながら生物学や心理学にとり組むことは、それを確かめずにとり組むことと比べ、天地の差があると言わざるを得ない。(斉藤政己)